

## 「666」の正体についての現実的な考察 一改訂版

このレポートは2011年4月に記した「40 黙示録13章の「666」の正体についての現実的な考察」に幾らかの編集と加筆を施したものです。主な加筆の部分には〔加筆〕マークを記してあります。

まず始めにこのレポートのテーマをなす、「666」の部分引用しておきましょう。

(黙示録 13:15 - 18)「それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。…すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。ここに知恵がある。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。」

関連聖句：

(黙示録 15:2)「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、・・・」

(黙示録 19:20)「獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼と一つしよに捕えられた。」

16節の、しるしが付される「右手や額」ですが、それらは「腹や足」とは違い、常に表立って目立つ場所であり、秘密にはしておけない場所、誰の目にも明らかに分かる、というような意味があると考えられます。

17節の、押される〔刻印〕が、「野獣のまたはその名の数字」という表現にある、「または」というのは「野獣の名」または「名の数字」のどちらか、という意味に取れますが、「または〔ギ語：ἢ εἰ〕」という接続詞は、「むしろ」「言い換えれば」「すなわち」という意味もあります。

また、黙示録15：2に「野獣とその像とその名を示す数字」と、3つ列挙されている表現からみても、刻印として、実際に記されるのは、「名を意味する、誰でもそれを連想できる数字」である可能性が高いようです。

しかし、この時代に、文字通り、消せない仕方で、(例えば「入れ墨のような」)皮膚に直に施す事は、いくら強制力をもってしても、さすがに、抵抗は、大きすぎるでしょうから、現実には、非常に考えにくいと思います。

この「666」については実に多くの人が様々な予測を立てています。そして、かなり、有力な線として言われているのが、個人情報データを集積した小さな「マイクロチップ」を各人の皮膚下に埋込み、それをコンピュータで読み取る方法であろうとされています。

しかしこれも、対象は全地の全人類です。大人も子供も含まれるでしょう。

今後、こうした先端技術が全世界にどれほど浸透するかは分かりませんが、技術的な格差

がある状況では、現実的では無いように思えます。さらにこれもまた、相当な抵抗が予想されます。

[加筆]

=仮にそうしたチップを埋め込むと言うような事が現実を試みられる事態が生じたとしても、「666 刻印」に関する聖書の記述、その目的などから言えば、聖書預言とは無関係であるに違いありません。

その、この刻印の目的は獣の崇拝者であることを明示させることにある訳ですから、「その名を示す数字とに打ち勝った人々」すなわち、その印を拒むものたちとの区別が) 誰の目にもはっきりと分かるような方法が採られるはずです。=

さらに忘れてならないのは、それを受けさせるのは「偽預言者」であるということです。(黙示録 19:20)「獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者」…」

つまり、「印を受ける」ことは、生死に関わるという意味で強制力を伴っているとは言え、それは「惑わし」の一つであり、人々は、その野獣を信頼し、全面的に自分の将来を託せると、思い込めるという状況だと言うことです。

ですから、その刻印も、自ら「認めて、受ける」あるいは積極的に支持して受ける類のものと考えられますから、「怪しまれる」方法や生理的に大きな抵抗を感じる方法が採られるとは考えにくく思えます。

恐らく、抵抗なく簡単に施せる何らかの方法が採られるはずです。

この点については、後でもう一度、現実的に考えられる可能性を、考慮します。

さて、「抵抗感がない」ということは、その刻印が獣の数字として、文字通り「666」という数字が自分の額や右手に記されるということも恐らくないだろうと思います。

なぜなら今日、実際、聖書を知らなくても、「666は悪魔の数字」といった話しは、映画や、マンガ、アニメなどによくでてくるもので、知らない人の方が少ないくらいでしょう。ですから露骨に「666」という刻印であれば、やはり「なんか気持ち悪い」という拒否反応は相当なものと同予測できます。

さて、改めて、「666」というのは野獣の名の数字 とは何かを別の角度から見てみましょう。幾つかの翻訳を見比べてみましょう。

口語訳：ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。

塚本訳：ここに知恵が(蔵されて)ある。理知ある者は(この)獣の数をかぞえよ。

それは人間の数である。(人の名である。) そして(その人の名を数うれば、) その数は六百六十六!

前田訳:ここに知恵がある。心あるものは獣の数をかぞえよ。それはひとりの人の数である。その数は六百六十六。

新共同:ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

KJV with Strong's : Here is wisdom Let him that hath understanding count the number of the beast for it is the number of a man and his number is Six hundred threescore and six

「人間の(数字)」と訳されている部分は、ギリシャ語原文[アンスローポス]を確認しても分かりますが、英語では[a man]であり、1人の人(男)という意味です。

ですから、野獣の数字というのは、政府、国家などの組織名ではなく、1人の男の名前「の数字」ということになります。

この個人が誰かについて、ダニエルの預言を通して明らかになるのは、10本の角のうち、3本を引き抜いて、最後に出て来る、冒瀆的で大仰な事を語る口を持つ「小さな角」(1人の王)であるに違いありません。

ヨハネは、あえて「ここが知恵の関係してくるところである。そう明な者は野獣の数字を計算しなさい。」と述べています

ここで用いられている「計算」という語句は、ギリ語:[フセフィゾー]という語です。

(このギリシャ語は、他にもう一箇所、ルカ14:28に「費用を計算する」という記述の中で用いられています。)

名前は計算できないので、一つのとらえ方として、名前に関する何らかの数字要素を、例えば足し算などのように演算した結果が666になるということを示唆してると考えられます。

しかし、単にそれだけではないようにも思えます。その理由は、野獣を代表する人間の名は、固有名詞ですから、それらしい人間が現れたなら、その名前が666という数を表すかどうか確かめてみる(計算する)ことはできますが、それまでは、どうしようもありません。しかし、すでに現れてから、それが分かったところで、どれほどの意味があるのでしょうか。果たして、ヨハネは「そう明な者は野獣の数字を計算しなさい」という言葉を、それが現れたその時点で言うよう勧めたのでしょうか。

それとも、他の預言と同様、読者が、祈りの内に識別力を働かせて、聖書中の他の内容から、その意味する所を把握することを勧めているのでしょうか。

[加筆]

=先に示したようにギリ語：[フセフィゾー]が用いられているルカ14：28でも、塔を建て始める前に「費用を計算する」というように、前もって予算を立てるという意味で使われています。=

そして「ここに知恵が必要である」と、敢えて付け加えられていることわりを考えると、やはり、事前に「計算」し得る何らかの要素が、聖書中に秘められていると考えて良いのではないのでしょうか。

であれば、この場合の「計算」は文字通りの数式の演算ではなく、「知恵を働かせた思考を駆使する」ということかも知れません。

ということで、私なりにそれを試みてみたいと思います。

では、いよいよ、この「666」は誰なのかについてですが、まず、聖書中にこの数字が出て来るのは、この黙示録13章以外に、次の3箇所（実質的には2箇所）、ですが、エズラの記述の666は、バビロンの捕囚から帰還した時の、人々のリスト中の記録であり、これに付いての他の情報はありませぬので、ここでは却下します。

(エズラ 2:13)「アドニカムの子らは六百六十六人。」

(列王第一 10:14)「一年間にソロモンのところにはいつて来た金の重さは、金の目方で六百六十六タラントであった。」(歴代第2 9：13は平行記述で、同内容)

この他、6がらみで関連があるかも知れないと思えるのはネフカドネザルが立てた金の像の記述があります。

(ダニエル 3:1,6)「ネフカデネザル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。

ひれ伏して拝まない者はだれでも、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。」

そして、もう一つ、特徴的に「6」の数字で彩られているのが「ゴリアテ」です。

(サムエル第二 21:20)「手の指、足の指が六本ずつで、合計二十四本指の闘士がいた。彼もまた、ラファの子孫であった。」

(サムエル第一 17:4)「ときに、ペリシテ人の陣営から、ひとりの代表戦士が出て来た。その名はゴリヤテ、ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半。」

(サムエル第一 17:36,46)「このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。あの割礼を受けていないペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をなぶったのですから。」「きょう、主はおまえを私の手に渡される。私はおまえを打って、おまえの頭を胴体から離し、きょう、ペリシテ人の陣営のしかばねを、空の鳥、地の獣に与える。」

これら、ゴリアテに関するこれらの記述には、黙示録 13章と興味深い関連が読み取れます。簡単にまとめますと、次のようになります。

ゴリアテの特徴： 神を嘲弄する。 戦いを挑む。 むやみに6がつきまとっている  
 ダビデの特徴： 杖を持って立ち向かう。 ゴリアテを獣の1匹のようにみなす。  
 剣によらず打ち倒す。その死骸を鳥に与える。

特に、17:36にある「獅子も熊も・・・獣の一匹のように」という表現と、ダニエル4章の「4頭の獣」の記述を比較すると、第1-獅子、第2-熊、第3-豹、第4-恐ろしい獣とあって、「ゴリアテを豹のような獣の一匹とみなす」という解釈を立てると、ゴリアテはギリシャ帝国を表すと捉えることが可能になります。

それで、実際、ペリシテ人について、調べると、興味深い事実が分かってきました。

次の文は、辞典等からの資料に基づいたものです。

「ペリシテ人（フィリスティア人）は紀元前13世紀から紀元前12世紀にかけて地中海東部地域に來襲した「海の民」と呼ばれる諸集団を構成した人々の一部であり、エーゲ海域とギリシアのミケーネ文明を担った人々に起源を持つとする説が有力である。

古代カナン南部の地中海沿岸地域周辺に入植した民族群。アシュドド、アシュケロン、エクロン、ガザ、ガトの5つの自治都市に定着して五市連合を形成していた。

彼らのルーツはハムの子ミツライム（エジプト）の子であるカフトルの子孫であるとされ、「カフトル島から来たカフトル人」と呼ばれている（『創世記』10:13-14、『申命記』2:23）。さらにこれを裏付ける記述は、『エレミヤ書』47章4節にも存在する。

カフトルが実際にどの地域を指しているのかについても諸説あるが、紀元前12世紀頃までに、すでに鉄の精製技術を有していたことなどから、クレタ島、キプロス島、あるいはアナトリア地方の小島の1つであった、などの候補が挙げられている。今日ではクレタ島であるとの見解が示されることが多い。

前4世紀後半、アレクサンドロス大王に攻略され、ペリシテ人としては、以後史上から消え、ギリシャ帝国に併合される。」

従って、ゴリアテの出身地は、シリア出身の「アンティオコス・エピファネスと同じギリシャ帝国であり、「北の王」である終末期の「小さな角」と同様であることが分かります。

さらには、ペリシテ人は古くから鉄を用いることでよく知られた民族でした。

「小さな角」も「鉄の脚」で表されるローマ帝国の終末期にいる10人の王からなる復活ローマを言わば乗っ取って、その力を利用するものであり、ゴリアテが、600シケルもの（7kg近い重さ）を用いている様子と重ね合わせることができるように思えます。

ゴリアテ対ダビデ のこのシーンと 良く似ている 野獣対キリスト に関する黙示録の記述をを比較してみました。

(黙示録 13:1)「また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。」

(黙示録 13:5 - 6)「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。」

野獣の特徴： 神を冒瀆し。 戦いを挑む。 666

(黙示録 19:19 - 20)「また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。

すると、獣は捕えられた。また、獣の前でしるしを行ない、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを感わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕えられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。」

キリストの裁きの特徴：「鉄の杖」を持ち。 野獣を捕らえ、生きたままゲヘナに投げ込む。

(その他のものは「剣」で殺された)。

すべての鳥は彼らの肉を食べた。

ネスカドネザルの金の像に関する記述と、黙示録 13章の比較

金の像の特徴： 高さ60、巾6 崇拝しない者を火に投げ込む

野獣の像の特徴： 666 崇拝しないものを「みな殺させるようにする」

ソロモンの金貨関する記述と、黙示録 13 章の比較

ソロモンの金貨： 主にエジプトからの金 666 タラント

野獣の特徴： 666 売り買いを禁ずる。「北の王」の並外れた資産 / 経済力  
(ダニエル 11:43)「彼は金銀の秘蔵物と、エジプトのすべての宝物を手に入れ・・・」

ここで、冒頭に述べた、「怪しまれない刻印」とはどんなものかに関する私の考察（推察）を述べておきます。

ここで思いに留めておきたい点は、「北の王」つまり野獣の「小さな角」の大きな特徴は、前述の膨大な経済力に加えて、狡猾さ、巧妙さを併せ持つ者であることがわかります。

(ダニエル 11:32)「巧言をもって墮落させる」

(ダニエル 8:23)「横柄で狡猾なひとりの王」

(ダニエル 8:25)「悪巧みによって欺きをその手で成功させ」

その持ち前の巧妙さと悪知恵で、それまで何世紀もの間、誰にも解決できなかった、(例えばパレスチナ問題など) 様々な問題を、解決すると人々に信じさせるに足る、知恵を示し、それこそ、神からの知恵と自他共に認めるという事になるのでしょう。

その者の像が造られ、崇拝を強要し、刻印を押し、売り買いができないようにする。これが666の正体です。

そして、そのものの目指すものは、世界統一国家ですから、恐らく、流れとしては、10 各国の連合国として再興隆した(ローマは死んでないので「復活」ではない)ローマ帝国が、たぶん第三次世界大戦で、「剣の一撃を受けた」あと、その中の3カ国を除いて、リーダーとして「小さな角」(シリアの王アンティオコス・エピファネスの現代版)が、かつてのギリシャ帝国の領土から出沒するに及んで、(この時は「死んだ」と思われていたので、「復活」して)、全地から驚嘆の目で見られ、世界政府としての歩みを始めようとするのでしょう。そして、急速にその計画が進められる中、求心的な目的を果たすために、その「像」が作られ、崇拝を推し進めるのでしょう。

(黙示録 13:14)「剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」

この表現から分かるのは、[像を作らさせる] 訳ですから、一つの像ではなく、恐らく、各国(すでに属国?)で独自に、そしていたるところで、作られるのでしょう。

そして、それに「息」が与えられ、崇拝しない者を「殺させる」と言うことです。

殺すのは誰なのでしょう。野獣でも、偽預言でもありません。主語は省かれています。「像」が殺すのでしょうか。

さて、ここまでで、全てのヒントは出そろいました。

結論です。

[加筆]

＝ここで改めて、「666」に関する次の聖句を考慮してみましょう。

「その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者」(黙示録 13:7)

「名の数字」と訳されている部分ですが、この「数字」という語は原語で「アリスモス」といい、数 [number], 合計 [total] という意味であり、いわゆる算用数字とか漢数字という概念で日本人が捉える「文字」と言うより「数」そのものであることが分かります。他の例：「その数 [アリスモス] はおよそ五千人であった」(ヨハネ 6:10)

「男の数 [アリスモス] が四百人ほどあり」(使徒 5:36)

ですから、獣の名の数は [合計 666] となるということであり、また数字を「持っている(ギリ語:エコー)は「持つ、所持、有している」という意味ですから、合計666なるものを何らかの形で所有している。という意味になります。

さて、解説書やインターネットなどのサイトで扱われている「666」に関するほとんど全ての記述に見られることですが、獣と獣の像、獣の数字と刻印、が混沌として、明確になっていない印象を受けます。

ここで改めて、その違いを確認しておきたいと思います。

「獣」とは：終末期に登場する、10本の角のある強力な政治体制。＝復興ローマであり、そこに11本目の角「小さな角(北の王)(反キリスト)」が台頭し全体を牛耳ることにより、この「獣」(国家／連合国)と「人間」(一人の男、反キリスト)が同一視されている状態。

「獣の像」とは：偽預言者によって、復活の記念として作らさせるもの(人工物、非人格的なもの)であるが、「息を与え」られるという比喩的表現により、あたかも人格を得たかのように「ものを言う(命令、強制力をもつ)」という権力行使の象徴とされるもの。

「獣の数字」とは：「獣」すなわち「反キリスト」の「名前」の数。「666」

「刻印」とは：「獣の名／数」を有していることを、対外的に明らかにするもの。つまり「獣の数」の「印影」。(ただし文字通り「666」という印影とは限らない)



それで、厳密に言うと「獣の像」と「666／刻印」は違います。それはちょうど、「判子」と「印鑑」の違いと同じです。

「判子」とは、名前を彫り込んだ棒状のもので、「印鑑」とはその印が押された紙などに見られる印影のことです。

この「像」と「刻印／666」の実体は何でしょうか。

新世界統一国家の誕生を記念するものとして、そして、国家としての機能を果たすもの、他国（属国）を牛耳るもの、つまり「世界通貨」に違いありません。そして、これまでの世界経済も、その時までにはすでに、ほとんど破綻同様の状態にあるかも知れません。

聖書から見いだされる「666についての情報」は、端的に言って、「金」「タラント」つまり当時の通貨であり、「売り買いする」ためのものです。

そして、「野獣の名の数字」という「数字」は単なる「数」という意味ではなく「通貨」を表す、比喩的な表現かもしれません。

通貨にはほとんど、その国の象徴となる人物の肖像（レリーフ）と発行者の名称そして数字（金額）が刻印されています。

近年、金融や経済の破綻などの問題点などから、「紙幣」を見直すべきだという論議が持ち上がっていますが、（古来の金本位制に戻り、兌換紙幣〔だかん-しへい、一定の金（Gold）と交換ができる〕を復活させるべき等）もしかすると再び、「金貨」が復活することも十分考えられます。

[加筆]

＝ところで、「獣の像」と訳される「像」という語の原語に注目しておくことにしましょう。これは「ギリ語：εἰκών エイコーン（アイコン）」で、コンピュータの用語としておなじみになっている「アイコン」の語源となっているもので、「画像、肖像、似顔絵」などの意味をもちます。

つまり言い直せば、偽預言者が全世界に向けて、「獣のアイコン」を作らせようとすると言う事です。

この語が使われている他の例として、カイザルに税金を払うべきか否かという問題に対してイエスがデナリ硬貨に言及された際にこう言われました。

「これは、だれの肖像（εἰκών エイコーン）ですか。だれの銘ですか。」（マタイ22:20）



アウグスツスのデナリ銀貨  
表：ローマ皇帝アウグスツス（オクタビウス）  
裏：ガイウス・カエサルとルキウス・カエサル。  
ローマ初代皇帝アウグスツス

それで、各国は、それまでの自国の通貨に替えて、新世界通貨を作ること余儀なくされ、野獣と偽預言者によって認可されることにより「息」を与えられ、それまでの通貨は、その新通貨に換金する必要に迫られるということでしょう。あるいはその両替の際に何らかの崇拝行為が求められるかもしれません。

いずれにせよ、通貨であれば、それを用いるのに、怪しむ人はいないでしょう。

刻印を受けていない者は誰も「売り買い」できないようにする。ということは、その所持や使用に何らかの崇拝が要求されるシステムが導入される。それが「息」を与えるということかもしれません。

そして、その通貨、硬貨あるいは紙幣には、666に関わる「名」が、そして、「計算すると」666になる、何らかの「数」が文字通り刻印されているかもしれません。

しかしむしろ、666は、「お金 (Money)」であり、人間の経済活動の象徴であり、そして、古来より個人の肖像が彫り込まれあるいは刷り込まれているものですから、単に、反キリスト個人の名前、肖像が入った六種類のセットかもしれません。

例えば、日本の硬貨も「計算して」全部足せば、合計666円になります。



もし、「名の数字」というものが文字通りだとしたら、その1人の男の名を古代の方法と同じ方法で、計算できるかもしれません。

ギリシャ語は、ヘブライ語と同じで、古代において、アルファベットの文字で数字を表していました。

終末期の野獣の（代表者の）名前の綴りを、数字に置き換えて計算すると666という合計が出るということかもしれません。

試しに、終末期に登場すると言われている『荒らす憎むべき者』の現代版（真打ち）、のモデル的役割を果たした前座の、かつての「エピファネス」の名を計算してみました。

（別 図を参照）

そこに出た数字は660でした。

単なる偶然かもしれませんが、偶然にしては、ちょっと「出来過ぎ」と思える程、近い数字です。

もし、これが、偶然ではなく、意図されたものだとしたら、最終的「荒嫌者」はさらに上を行く、完璧なサタンの成り代わりとして、言わば完成された、反キリストとなるもので、「不法の人」「滅びの子」として最適な名とその666という数字を帯びるのではないかと考えられます。



セウレコス朝シリア アンティオコス  
4世エピファネスの像の入った金貨

アンティオコス4世 エピファネス **επιφανής**

アンティオコスは1世から13世までセレウコス朝の君主であった。  
その第4代目の固有名が「エピファネス」である。

イオニア式数字(ギリシア数字)

文字	ヨミ	数値	文字	ヨミ	数値	文字	ヨミ	数値
Α´ α´	アルファ	1	Ι´ ι´	イオタ	10	Ρ´ ρ´	ロー	100
Β´ β´	ベータ	2	Κ´ κ´	カツパ	20	Σ´ σ´	シグマ	200
Γ´ γ´	ガンマ	3	Λ´ λ´	ラムダ	30	Τ´ τ´	タウ	300
Δ´ δ´	デルタ	4	Μ´ μ´	ミュー	40	Υ´ υ´	ウブシロン	400
Ε´ ε´	イブシロン	5	Ν´ ν´	ニュー	50	Φ´ φ´	ファイ	500
Ϛ´ ϛ´	スティグマ	6	Ξ´ ξ´	グザイ	60	Χ´ χ´	カイ	600
Ζ´ ζ´	ゼータ	7	Ο´ ο´	オミクロン	70	Ψ´ ψ´	プサイ	700
Η´ η´	イータ	8	Π´ π´	パイ	80	Ω´ ω´	オメガ	800
Θ´ θ´	シータ	9	Ϟ´ ϟ´	コツパ	90	Ϡ´ ϡ´	サンピ	900

**Ε π ι φ α ν ή Ϛ**

$$5 + 80 + 10 + 500 + 1 + 50 + 8 + 6 = 660$$